

時空の漂泊

(二〇〇六年三月十五日 第二十五号)

前田勲男

都心での移り住み 直下地震

さる二月十六日、東京都防災会議から「首都直下地震による東京の被害想定」という報告書が発表され、その内容が各紙でも紹介された。

「阪神淡路大震災」並のM七・三の「東京湾北部地震」が起こった場合は、二三区のうち足立、江東など河川が運んできた土砂が堆積した地盤の弱い土地の東部を中心に約五割の地域が

震度^二六強の揺れを記録する。十万棟以上の家屋などが全壊、四十万棟近くが半壊。火災で約三十万棟が焼失。死者数は約五千人に達すると想定される。

三割強の世帯が断水し、約二割の世帯が停電し、ガス供給も止まる。公共交通機関の停止などにより外出中の三割以上、三百万人以上が帰宅困難になる。一万台近いエレベーターが停まり、人が閉じこめられる。

こんなことが各紙で報道された。テレビのニュースでも報道された。

しかし、注目されたのは一時のことだった。毎日、毎日、これでもかこれでもかと興味をそそるだけが目的のように味噌も糞も一緒に流される情報の洪水に埋没してしまった。

このニュースを聞いて、僕は直ちに東京都のホームページにアクセスした。最近では情報公開が進んでいるので、報告書全文が掲載されているに違いないと思ったからだ。しかし、まだホームページは更新されおらず、報告書は見当たらなかった。

お台場海浜公園

つい先日、三月五日の日曜日、レインボーブリッジを渡って、東京の人気スポットになっている「お台場海浜公

^一M…マグニチュード (magnitude) 地震の規模 (エネルギー) を表す尺度。いくつかの算出計算式があるが、いずれも地震波の最大振幅を基に算出される。ちなみに阪神淡路大震災もM七・三、関東大震災はM七・九だったという。Mの計算式は「対数」が入ったもので、Mが一増えるということは、エネルギーとしては、約三〇倍になることを意味している。

^二地震強さを身体感覚や周囲の状況によって、いくつかの階級に区別したもの。深度六とは「烈震」———家屋の倒壊は三割以下、山くずれが起き、地割れを生じ、多くの人々が立っていることができないう程度の地震とされている。



園」に初めて行った。

朝起きたら数日ぶりに晴れ上がり

暖かい。外出して、体調を崩して溜め

てしまった雑件を新宿の伊勢丹など

に朝一番で出掛けて一気に片付けた。

その後、まったくの突然の思い付きで、

「お台場海浜公園」に車を走らせた。

変わったところで昼飯を楽しみたくな
ったからだ。

二月中旬、イタリア、ミラノ郊外の

ホテルで開催される二日間の会議に

出席するため、三泊四日（機中一泊）

の強行軍で行った。もともと寒いのは

苦手の上に、トリノの冬期オリンピック

クとぶつかり混雑していそうで、行く

のは憂鬱^{ゆううつ}だった。でも、大切な本業な

ので逃げられない。それで渋々ながら

行った。

戻って数日後、カンボジアのシエム

リアップに二泊三日（機中一泊）の強

行軍で、上智大学アジア人材養成研究

センターに新システム導入のための

インフラの実態調査と改善計画のと

りまとめのために出かけた。

これは仕事ではない。ボランティア
である。しかし、大学の予算の関係上、

改善計画をまとめ、その承認を得て必

要な機材の調達を年度内にやらなけ

ればならず、時間的な余裕がないとい

う事情を聞かされると、頼みを断るこ

とはできなかつた。それで協力を快諾

してくれた電源メーカーの専門家と

二人で出掛けた。

ミラノでの会議は出席して本当に

有意義であつたし、上智大学アジア人

材養成研究センターのインフラ改善

計画もまとめ上げることができ、それ

で新システム導入が具体的に動き出

したのも良かったのだけれど、僕の身

体が、その後、突然、変調をきたした。

夜十時頃、どうも変なので体温計で測

ったら、四十度近い高熱だった。

取りあえず手元にあった薬を服用

し、翌朝、主治医のいる東京女子医大
に行った。歩いて一分も掛からないと
ころに居続けている意味がこういう
時には本領を發揮する。

いろいろ検査したけれど、インフル
エンザでも鳥インフルエンザでもカ
ンボジアなどの風土病でもなかった。
結局、原因不明。多分、疲労蓄積だろ
うということだった。念のためにとい
うことで薬を処方してもらった。

高熱でも食欲は衰えなかったし、薬
を服用し、熱も下がったのだけれど、
身体の芯しんが変な気分はなかなか消え
なかった。ようやく、それが少し晴れ、
溜まった雑件を片付ける気持ちにな
った時のことだった。



「お台場海浜公園」の中心部の駐車
場は長い待ち行列であり、臨時駐車場
の標識が目に入ったので迷わずに向
かった。お目当ての場所からかなり離
れた場所だったけれど、空すいており、
すぐに車を入れることができた。

—————
天気良かったので、離れているこ
となど苦にならなかった。浜辺を歩い
てレストランなどがある人気スポッ
トに向かった。

何もかもが新鮮な驚きだった。レイ
ンボーブリッジ開通は一九九三年夏
のことで、それからすでに十年以上た
っている。計算してみたら、すでに何
百回も車で渡ったことになる。

しかし、肝心のお台場に降りたのは
「東京ビッグサイト」で開催される各
種の展示会の時だけだった。合計して
十回ぐらいで、しかも、その時は、い
つも会場に直行し、そして直帰するだ
けだった。車で橋の上から眺める見慣
れた風景と、下での眺めとはまったく
違っていた。



砂浜は清掃が行き届き綺麗だ。ヘッドフォンで音楽を聴きながらジョギングする人、アサリを採っている親子、ウインドサーフィンを楽しむ人。林立するマンションのベランダには、布団ふとんなどが干されている。



人工的な街。オフィスだけの街。そんなイメージしか持っていなかっただけに、驚きの連続だった。

お目当てのレストランなどがあるショッピングビルに着いて、また驚かされた。この頁の一番上の写真の中央、



木立の上に見える中層の横長の建物である。

各階とも海側は幅広いウッドデッキである。親子連れで、カップルで、一人で、あるいは犬を連れて散策しており、大変な賑わいだった。

サンフランシスコのフィッシャー
マンズ・ワーフ（漁師波止場…
Fisherman's Wharf）の一面にある、
再開発で観光スポットになったピア
39（Pier 39：第三十九さんばし栈橋）を思
い起こさせる雰囲気だった。

首都直下地震

日溜まりの椅子に陣取り、リラック
スして軽食をとりながら、久しぶりに
目の前を往来する人たちのヒューマ
ン・ウォッチングを楽しんだ。

その時、突然、ここは「十三号埋立
地」だということを思い出した。

いまは港区台場という住所だけ
ど、もともとは「十三号埋立地」と呼

ばれていたところだ。「十三号埋立地」
という名前の代わりに、港区台場、品
川区東八潮、江東区青海などの名称が
使われている事に気が付いた。

そして、もう十年以上も前になるけれ
ど、一九九五年一月十七日の阪神淡路大
震災で、神戸市が「ナウさ」と「眺望」
を売り物にしていた人工島の「神戸ポ
トアイランド」全体が液状化現象で水浸
しになったことを思い出した。

何十メートルの地下の地盤まで基礎
を打ち込んで建設された高層ビルは倒
壊はしなかったけれど、大きな段差が地
表との間に生じ、上下水道やガスや電力
などのインフラがやられて、使えなくな
ってしまったこと。この人工島と陸とを
結ぶ命綱の「神戸大橋」の橋脚もずれ、

そこにあつた水道管も陥落し、「孤島」
になってしまったこと。

「神戸ポートアイランド」が完成して
から間もない頃、仕事の関係で、自慢の
モノレールにも乗り、そこに建設された
最新のホテルにも宿泊しただけに、そん
な影像を見て、衝撃を受けたことを思い
出した。

その衝撃の影像が、目の前の平和で
のどかな光景に重なった。そうしたら
気分がすっかり醒めてしまった。早く、
はるかに安全なところにある自分の
マンションに戻りたくなった。いつ
「首都直下地震」は起きてもおかしく
ない、十年以内に「首都直下地震」が
起こる確立は、九割ぐらいだというの

が専門家の一致した見解だと、いつも思っているからだ。

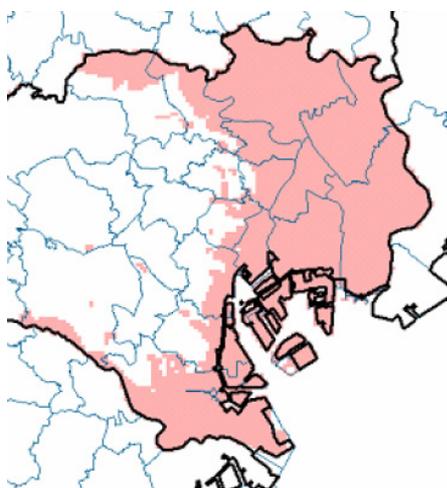
「君子は危うきに近寄らず」という。君子（学識・人格ともに優れ、徳行の備わった人）は、身を慎み、危険なことは初めから避ける――たしか、そんな意味だったと思う。孔子（紀元前五五一年～四七九年）が紀元前七百年頃から五百年頃までの二百年以上の時代をまとめた中国の史記「春秋」に出てくる一文である。

君子とはほど遠い存在だし、しかも危険を冒すことなど厭わないけれど、その前の「身を慎み」という言葉には反論はできない。君子でなくても、ともかく無意味な危険は避けた方が良いという気分を襲われた。

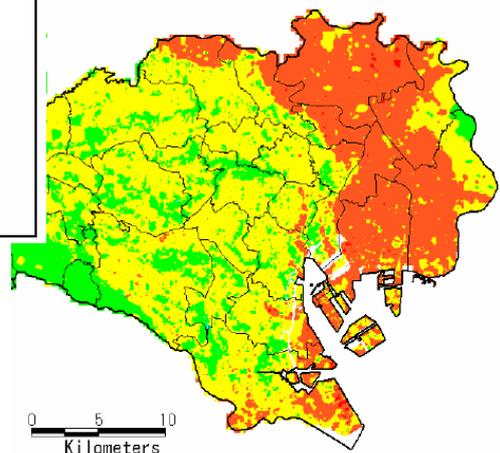
ちょうど満席になって空席待ちの人の行列ができたので、支払いを済ませ、レストランを後にした。

自宅に戻り、一息ついたところで、再び東京都のホームページにアクセスしたら、今度は「東京直下地震による東京の被害想定」という報告書を見ることができた。

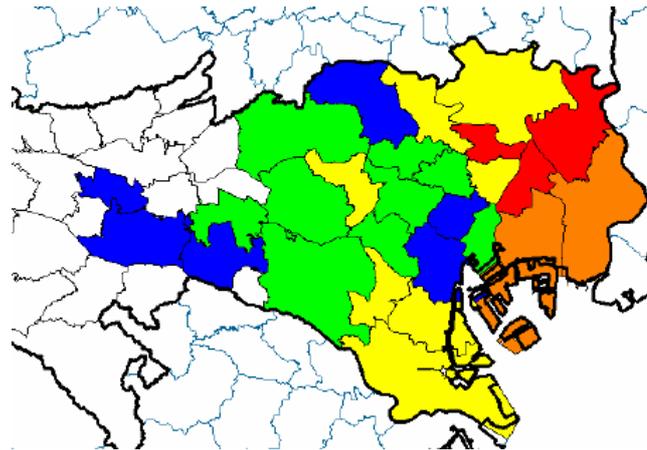
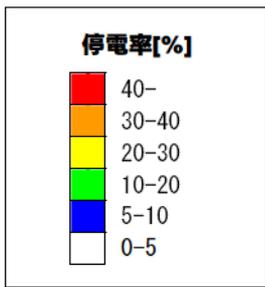
細かいことは分からないけれど、それでも結論は一目瞭然であった。細かいことは分からないけれど、それでも結論は一目瞭然であった。やっぱり「沖積世」の地層と「埋立地」は、地盤が揺れやすく、液状化の発生しやすい所だった。



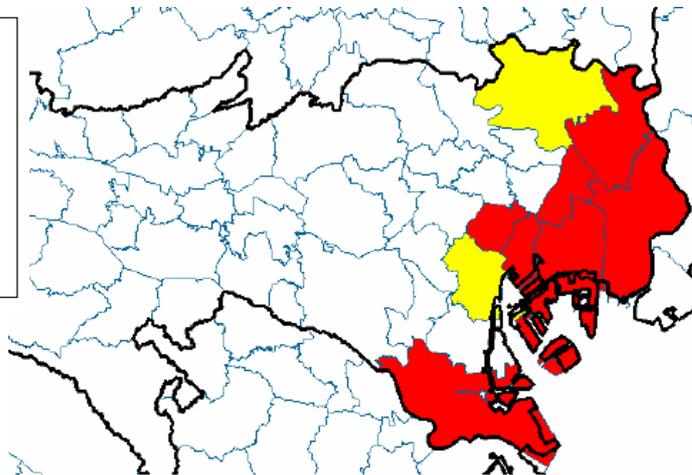
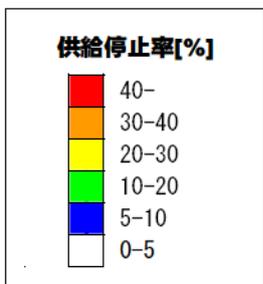
液状化の発生可能性の高い地域



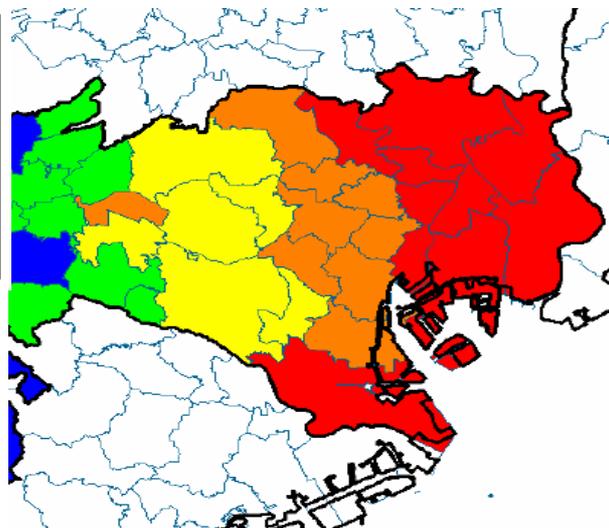
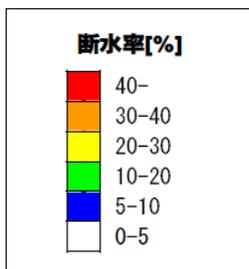
地盤の揺れやすさ



ライフラインの被害分布—電力
M7.3 東京湾北部地震



ライフラインの被害分布—ガス
M7.3 東京湾北部地震

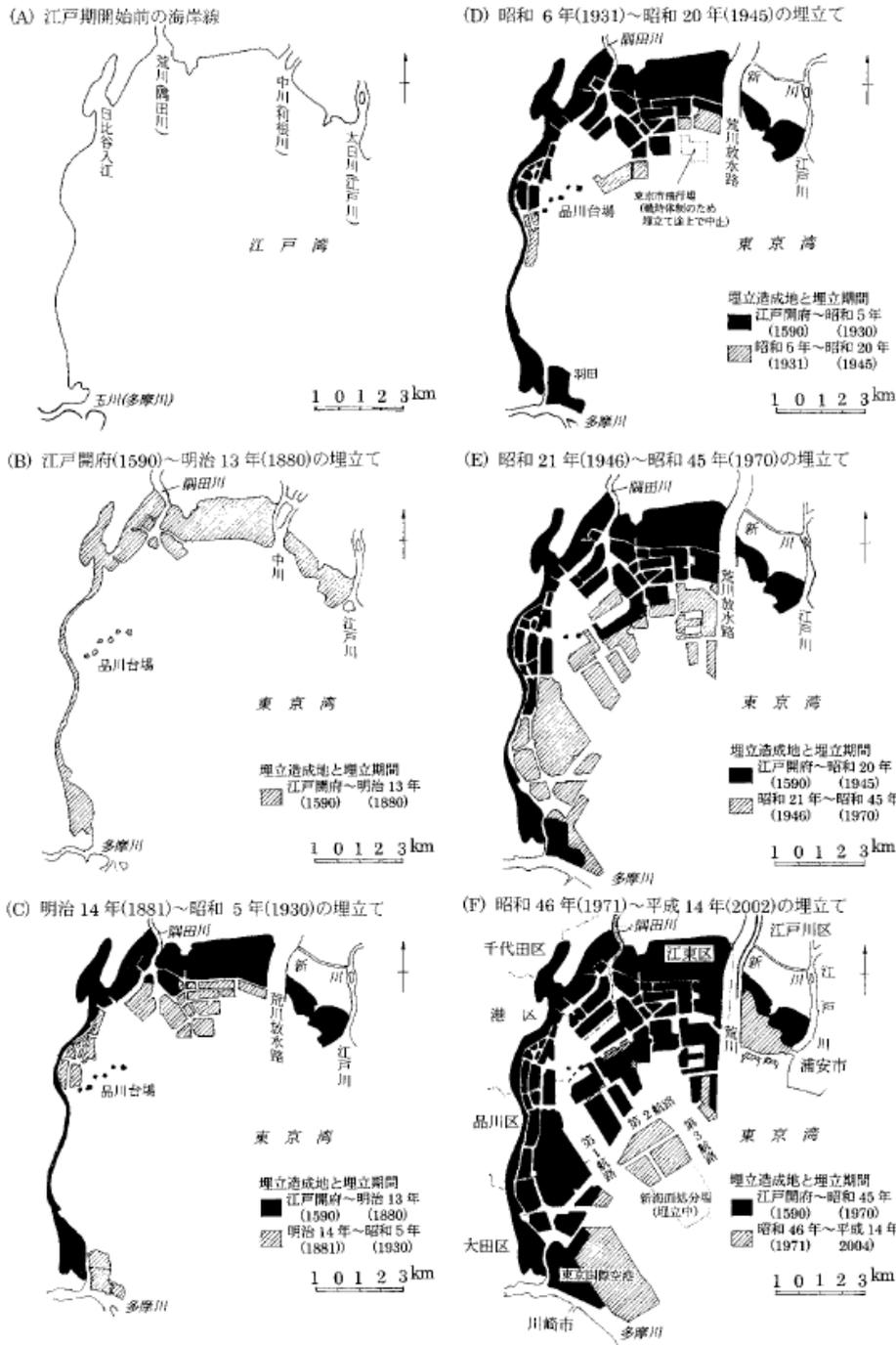


ライフラインの被害分布—上水道
M7.3 東京湾北部地震

「M7・3の「東京湾北部地震」によるライフラインの被害想定の結果も、ほとんどこれとリンクしていた。

葛飾区、墨田区、荒川区の三区では四割以上が停電する。江戸川区と江東区の二区は三〜四割が停電する。

ガスは、葛飾区、江戸川区、墨田区、江東区、中央区、台東区、それと大田区では四割以上が供給停止となる。上水道も、足立区、葛飾区、江戸川区、江東区、墨田区、台東区、荒川区、中



東京臨海部における江戸期開始の1590年から2002年までの埋立地変遷の歴史
 ——「東京都臨海域における埋立地造成の歴史」遠藤 毅——
 (「地学雑誌」113(6)785-801 2004)

中央区、それと大田区では四割以上が断水するという。

東京湾岸沿いの地域には、相次いで超高層ビルが出現している。かつて

「十号埋立地」と呼ばれたところは江東区有明となり、「十三号埋立地」は江東区青海、港区台場、品川区東八潮

として開発が進められていく。それだけではない。江東区豊洲・東雲、中央区晴海・月島、港区東新橋（汐留）・芝浦・港南（JR品川駅海側）、品川区東品川（天王洲ザイル）などにも次々とハイクラスを駆使した瀟洒な高層ビルが出現している。

これらの地域は時期は違っても、すべて

「埋立地」である。いくら超高層ビルの基盤が地下の深い安定した「東京礫層」にまで打ち込まれ、安全だと言われても、大地震が起これば、周囲の土地は液状化する。

そうならばインフラは間違いなく大きな被害を受け、超高層ビルのハイテク機能も停止するだろう。東京では「洪積世」の地層の上に住まなければ駄目だと、一連の資料に目を通して再確認した。

(つづく)